

『源氏物語』御法卷の「萩の上露」

——紫上最終詠歌の歌語をめぐって——

植田恭代

はじめに

さまざまな言葉によって紡ぎ出される『源氏物語』では、物語世界の人々それぞれに見合った確かな言葉を用いて人物像が造型される。作中和歌においても、登場人物たちにふさわしく詠まれ、それが場面を構築し、物語の展開を促していく。時代のなかで『源氏物語』が評価され読み継がれていくなかで、当たり前のように受けとめられがちな言葉も、あらためてたどってみると、場面や造型に見合うように言葉が的確に選ばとられていることに気づかされる。ここでは、紫上の終焉を描く御法卷の、紫上と光源氏、明石中宮による唱和場面をとりあげ、紫上の和歌に詠まれる語について、いまだ一度検討を試みる。

一、御法卷の三者詠

臨終間近な紫上と光源氏、見舞いのために退出してきた養女明石中宮が和歌を唱和する御法卷の場面は国宝源氏物語絵巻にも残され、悲しみを表す心象風景と詞書の乱れ書きでも知られる。この三者詠は、晩秋の風に吹き乱れる前栽を前に、三者三様の思いをこめて詠み出される。

風すごく吹き出でたる夕暮に、前栽見たまふとて、脇息によりあたまへるを、院渡りて見たてまつりたまひて、「今日は、いとよく起きぬたまふめるは。この御前にては、こよなく御心もはればれしげなめりかし」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをもいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がんと思ふに、あはれなれば、

おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるる萩のうは露

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先だつほど経ずもがな

とて、御涙をひひあへたまはず。宮、

秋風にしばしとまらぬつゆの世をたれか草葉のうへとのみ見ん

と聞こえかはしたまふ御容貌どもあらまほしく、見るかひあるにつけても、かくて千年を過ぐすわざもがなと思さるれど、心にはかなはぬことなれば、かけとめん方なきぞ悲しかりける。

御法巻 五〇四―五〇五頁

紫上の一首を受けて光源氏が詠み、涙にくれるその場を取めるように明石中宮の和歌が続く。ここで詠まれる紫上の和歌は物語世界におけるその生涯の最終に置かれ、それゆえ注目も集める。倉田実氏はこの最終詠を「辞世の歌」とみなし母娘の関係のなかで詠まれることを指摘され、吉見健夫氏は光源氏との人間関係を重視する。三者の唱和は生涯の伴侶とその養女によって詠まれ、そこに三者の関係を浮かび上がらせる。独詠歌ではなく、親密な人間関係のなかで詠まれてくる紫上の一首は、物語世界における紫上の生涯が、身近な人々との関わりによって紡ぎ出されてきたことを表しているよう。

この紫上の一首を「辞世の歌」とする理由としては、風に吹かれる存在としての自覚^①や、自照性などが指摘される。登場人物の詠歌の掉尾に置かれるのが辞世歌とは限らないが、紫上のこの一首がわが身の自覚という意識から詠み出されているのは揺るがない。「萩」に置く露ははかなさを象徴し、風に吹き乱れる設定には臨終間近な予感を抱く紫上が重ねられている。しかし、紫上自身に詠む時点で辞世が自覚されていたのかは、当該場面の物語本文のみからは判断し難い。

当人に「いまはの際」が認識されているかどうかという観点からすれば、紫上は自身の容態を自覚しつつも明確な描写がなされているわけではなく、『伊勢物語』二二五段の「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを」という辞世歌とは、趣を異にする。それにもかかわらず、紫上のこの一首を辞世歌とみなす解釈がなされるのは、御法巻開始からここに至るまでの物語描写による。歳月の経過とともに描かれる紫上自身や周囲の人々の姿ならびに心情の描写が、この歌を辞世歌とも受けとめるように機能していくのである。

また、動揺する光源氏や女性たちとの贈答歌に加えて、幼い三宮との会話は余命幾ばくもないことを強く印象づける。「まろがはべらざらむに、思し出でなんや」(御法巻 五〇二頁)という紫上の問いかけに、「おはせずは心地むつかしかりなむ」(同 五〇二頁)と応じ、さらに紅梅と桜を託し仏にも供えることも頼む紫上の言葉に、「御顔をまもりて、涙の落つべかめれば立ちておはしぬ」(同

五〇三頁）と状況を察して涙を必死にこらえるけなげな姿が、終焉間近な紫上を照らし出していく。それを受ける「この宮と姫宮とをぞ、見さしこきえたまはんこと、口惜しくあはれに思されける」（同五〇三頁）という描写は、紫上最晩年の心情にほかならない。

ただ、紫上の最終詠では、そうした心情語にはよらず、あくまでもわが身を象徴する景物が詠まれている。みずからをみつめて詠まれるのが、「萩のうは（上）露」という語である。

この紫上の象徴として用いられる「萩のうは（上）露」について、歌語という観点からいま一度考えてみたい。

二、歌語「萩の上露」

「萩」も「露」も、すでに『万葉集』から詠まれる歌語である。歌ことばの事典でも、主として秋に用いられ草木の上に置く事が多く、萩の上の露は用例が多いという説明がなされている。

「萩」と「露」がともに詠まれる歌も、『万葉集』からみられる。

あきののに さけるあきはぎ あきかぜに なびけるうへに
あきのつゆおけり

『万葉集』卷八 一六〇一 「大伴宿祢家持秋歌三首」

このころの あきかぜさむし はぎのはな ちらすしらつゆ
おきにけらしも

『万葉集』卷一〇 二二七九

秋の景物として「萩」と「露」が取り合わせられており、これは早い時期から定番の取り合わせといえよう。

『古今和歌集』では、秋の景物として一連の露を詠む歌がならび、「萩」と「露」を取り合わせて詠む歌がある。

223 をりてみばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわわにおけるしらつ

ゆ 『古今和歌集』卷第四 秋歌上（題しらず よみ人しらず）

そのなかに「萩の上の露」が詠まれる歌を見出せる。

221 なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ

『古今和歌集』卷第四 秋歌上（題知らず よみ人しらず）

物思いをするとき、萩の上におく露を鳴き渡る雁の涙と見立てた一首である。萩の花は紅く、露も紅く映る。ここには、究極の悲しみを象徴的に表す常套語としてある「紅涙」がイメージされている。「秋に物思いをする心情から、萩の上の露を悲しみを表す紅涙と見立てる趣向である。萩の上におく露は、白露としてとらえられるのではなく、漢語由来の「紅涙」を前提として、あえて紅色ととらえるのが、この歌の特徴である。これは『秋萩集』二番歌にも収められる。

『拾遺和歌集』雑下には、藤原伊衡が凡河内躬恒と壬生忠岑に「白

露「萩の下葉」に関して訊ねた問答歌が収められ、一連の歌の最初の三首に「萩」「露」が詠まれている。

513 白露はうへよりおくをいかなれば萩のしたばのまづもみづらん
みつねただみねにとひ侍りける 参議伊衡

514 さをしかのしがらみふする秋萩はしたばやうへになりかへるら
みたふ みつね

515 秋はぎはまづさすえよりうつろふをつゆのわくとは思はざらな
む ただみね

このあと問答歌は「松の下葉」にかわり、さらに続く。

一方、歌語「萩の上の露」としてみると、『古今和歌集』以後、勅撰集や私家集に詠まれる用例数としては多くはない。『古今和歌六帖』第六帖には「秋はぎ」として一連の歌があるが、「萩の上の露」はみられない。

また、歌題としては『基俊集』までくだる。

37 つまこふる鹿の涙か秋はぎにこぼれぬばかりおける白露
はぎのうへのつゆ 『基俊集』

この歌では「白露」とあり、萩の上に置く露を妻を恋う鹿の涙に

見立てている。『古今和歌集』二二二番歌の知名度は高いはずだが、萩の上に置く露が必ずしも紅く光るとは限らない。

その他、次のような用例が見出せる。

143 ひとのいへに萩うゑたる見て

人こふるしかのなみだもかからじをいまさへかかるはぎのうへの露
『元真集』

119 世の中を何にたとへんあかねさす朝日さすまの萩のうへの露
『順集』
応和元年七月十一日に、よつなるをんなごをうしなひて、おなじ年の八月六日に、又いつつなるをのこ子をうしなひて、無常の思ひ、ことにふれておこる、かなしびのなみだかわかず、古万葉集の中に沙弥満誓がよめる歌の中に、世の中をなににたとへんといへることをとりて、かしらにおきてよめる歌十首

224 えもたわにしほれぬるかとおもふまでいくそかおけるはぎのうへの露
『好忠集』

140 はかなくてきゆとこそみれ色ふかくおきにははせる萩のうへの露
はぎの露
『大式高遠集』

この歌では「白露」とあり、萩の上に置く露を妻を恋う鹿の涙に

はぎ

146 さをしかは秋になりけり萩のうへの露くれなゐにみち〔マ、マ〕

『和泉式部集』

このごろ、ものいふこゑをたちぎきて、人のきこえんなど
いひたるに

825 萩の上に露ふきそへしかりがねをうはの空にもききてけるかな

『和泉式部集』

おもふ事ありしころ、はぎを見て

33 おきあかしみつつながむるはぎのうへの露吹きみだるあきのよ
のかぜ

『伊勢大輔集』

元真、順、好忠という男性たちの歌集にあり、また、紫式部と同時代の女性歌人たちの歌にある。順の歌の詞書に相次いで子を失い無常の思いがごとくにふれておこるとあるように、「萩」がはかなさの象徴としてあるのは共通認識とみられ、物思いとともに詠まれている。『和泉式部集』一四六番歌は、萩の上の露を紅色ととらえており、『古今和歌集』二二二番歌と同様の発想である。

また、『和泉式部続集』には詞書に「萩上露」もみられる。

人の家に、萩のころ、萩上露と云ふ事を云ひたるに、こと

468 萩原にふす男鹿もいはれたりただ吹く風にまかせてをのみよ

わりなる事どもを云ひつづくれれば、えとふまじと云ひたるに

榊原本本文の「萩上露」が、そのまま漢語として用いられているとは考えにくく、やはり和語として訓みくだすべきであろう。詞書は、相手に「萩上露」と言ったら「あなたはもつともなことを言うから訪ねていけない」という返事が来たので、という意。「萩上露」を女性のこととするのか、男性とするのか、解釈の揺れるところだが、『和泉式部集全釈』は「萩の上の露」と読み、男が手折りやすい女に用いる語をわざと男に対して用いて皮肉った歌と解釈する。女性のことをたとえたという意味は動かない。『古今和歌集』二二二番歌もあることを思えば、「上の露」と詠む方が自然であろう。

しかし、『源氏物語』御法巻では、「萩の上の露」ではなく、「萩のうは（上）露」と詠まれている。「の」が入るかどうか、ただ一文字の違いながら、定型の和歌のなかで、あえて「はぎのうへのつゆ」と詠まれてきた歌語とは、響きが異なる。二つの歌語を同一視することには慎重にならざるを得ない。「萩」でなくても、「菊の上の露」は『貫之集』三三一番歌、『忠見集』四六番歌、『一条撰政御集』一〇四番歌、『古今和歌六帖』一九二番歌、『能宣集』（書陵部藏五一〇・一二）三二五番歌、『実方集』三二二番歌詞書、同三四七番歌、『冷泉院御集』一二番歌などにみえ、「上の露」という言い方は広く用いられている。「萩の上の露」と「萩のうは（上）露」は、

よく似た別の歌語としてとらえられよう。

「上露」という語は、『新撰万葉集』に一例と『本院侍従集』に一例ずつ見えるのみで、先行物語作品にもみえず、およそ定着していた歌語とは考えにくい。さらに、『源氏物語』以後の『新撰朗詠集』に「上露」があり、和歌のことばというより漢語的な響きさえ漂う歌語である。

こうしてたどりみると、御法巻の「萩のうは（上）露」は、『古今和歌集』二二二番歌によく似ているものの、ぴたりと一致する歌語ではなく、むしろ漢語的な響きさえ感じられる当代的な印象の歌語なのではないか。

御法巻では「萩の上露」だが、「萩の下露」という言葉はあり、それについては、田中幹子氏の詳細な研究によって、これが漢語的な発想にもとづくことが明らかにされている。¹⁰⁾

田中氏によると、萩の「下露」は、『和漢朗詠集』の「秋興」にみられる。

229 あきはなほゆふまぐれこそただならぬをぎのうはかぜはぎのし
たつゆ 『和漢朗詠集』「秋興」 義孝少将

藤原義孝は一条摂政伊尹の子、『拾遺和歌集』『後拾遺和歌集』等に入集、『後拾遺和歌集』恋二・六六九番歌「君がため惜しからざりし命さへ長くもがなと思ひぬるかな」は、百人一首にとられたこ

とでも知られる。この義孝の歌は、白居易の「暮立」を典拠とし、下の句では、漢詩素材の「をぎ（萩）」と和歌素材の「はぎ（萩）」を組み合わせ、「上風」「下露」という漢詩の対象表現となっていることを、田中氏は指摘されている。

この下の句は『撰集抄』の説話にもとられており、人口に膾炙したエピソードであろう。歌語「萩の下露」も漢語的な趣向とともに、広く知られるところとなったと考えられる。

「萩の下露」の用例としては、天禄三年（九七二）八月に行われた「女四宮歌合」の判詞に一例みられるほか、歌に詠まれた例としては、次のような例が確認できる。

547 まちどほに思ひしあきはふけにけりしるくぞみゆるはぎのした
露 『好忠集』「恋十」

また、『和漢朗詠集』二二九番歌は藤原公任による秀歌撰『深窓秘抄』にも収められ（四三番歌）、漢詩文に通じた男性たちに好まれた歌語のようである。『和漢朗詠集』以前に必ずしも「萩の上風」と対句仕立てで詠まれているわけではないが、漢語調の響きを有するのが歌語「萩の下露」であろう。

「萩のうは露」という語は、『万葉集』以来好まれてきた「萩」「露」の語を用い、『古今和歌集』で広く膾炙した「萩の上の露」を背景に持ちつつ、一方で、漢語的な「萩の下露」に類似する詠みくちの語でもある。

みずからをみつめる紫上は、そのような歌語を用いて我が身を詠む。定番の語そのままではなく、知的で新しささえ感じられる言葉で、まっすぐにみつめる我が身を表している。

「萩のうは(上)露」は、むしろ『源氏物語』御法巻の当該場面によって、広く浸透した歌語というべきであろう。紫上が何色に光る萩の上に置く露をみていたのかは言及されず、想像に委ねられて立ち上る色がある。ここに至る紫上の心情と、続く臨終描写の「消えゆく露の心地して」「消えはてたまひぬ」(御法巻 五〇六頁)という、語り手視線の和語的な「露」の表現と呼応しつつ、紫上の側からわが身を的確にとらえて表すのが「萩のうは(上)露」である。

三、物語における「萩」と「露」

『源氏物語』に立ち戻ると、萩の上の露「萩の下露」「萩の下の露」はみられない。

「上の露」という語も一例のみで、若菜上巻で明石入道の語る言葉のなかに、「過ぎにし方の年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにもただ御事を心にかけて、蓮の上の露の願ひをばさしおきてなむ、念じたてまつりし」(若菜上 一―三頁)とあり、出家した入道の願いを表す用例である。先行する散文作品では、『蜻蛉日記』で道綱母の歌に「花のうへの露の心」「蓮のうへの露」の二例を確認する。

一方、「萩のうは(上)露」という語についてみると、『源氏物語』以前の作品には確認できず、『源氏物語』では御法巻の当該場面と、

夕顔巻に「上露」の一例のみである。夕顔巻の「上露」一例は、某の院で急死する前、光源氏の和歌を受けての一首「光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時のそらめなりけり」(夕顔巻 一六二頁)であり、「上露」は光源氏の容貌を表し、夕顔の上露のようなあなた様の顔の意となり、はかなさの喩えではない。

また、「下露」は『源氏物語』に二例あり、蓬生巻で惟光の会話のなかに「げに木の下露は、野分巻で光源氏の玉鬘への返歌に「した露になびかましかば女郎花あらし風にはしをれざらまし」(野分巻 二八〇―二八一頁)とある。ちなみに、先行する散文作品では、やはり『蜻蛉日記』に「木の下露」が二例あり、侍女の歌(中巻 二四三頁)と道綱の歌(下巻 三〇三頁)に詠まれる歌語としてある。「下の露」は『源氏物語』にも先行作品にも用例は見出せない。そもそも、「萩」も「露」も文学の定番の語でありながら、組み合わせた特定語としてみると用例は多いわけではなく、「上露」「下露」じたい、歌語として多用されてはいない。

もちろん、人の心情をも重ねて自然描写を重んじる『源氏物語』において、「萩」と「露」は重要な語として折々に用いられる。冒頭の桐壺巻から、桐壺更衣の哀傷場面で「露」が散見し、桐壺更衣の母君を頼負命婦が訪ねるくだりでは、帝の手紙にしたためられた和歌に、「萩」とともに「露」が詠み込まれていた。

宮城野の露吹きむすぶ風の音に小萩がもとを思ひこそやれ

桐壺巻 二九頁

この「小萩」は遺された若宮、すなわち幼い光源氏を表す。秋という季節のなかで、更衣を失い悲嘆にくれる帝の、遺された若宮を案じる親の心情であり、更衣の死という衝撃を受けとめきれず哀しみにくれる周囲の心情が託される語としてある。

しかし、桐壺更衣その人の歌に、「萩」「露」が詠まれているわけではない。物語開始からほどなくこの世を去った桐壺更衣の最終詠は、生きることを切望する歌であった。

かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

桐壺巻 二二三頁

桐壺帝と桐壺更衣の悲恋物語は光源氏誕生前史でもあるが、一方で、更衣唯一の詠歌には、はかない生涯ながら一人の女性の主張がこめられている。「いかまほしきは命なりけり」、すなわち生きたいのはこの命なのです、という、一首の和歌としてはぎくしゃくした印象さえ感じられる詠みくちの一首は、生きたいという強烈な生への執着が表出された絶唱である。「露」が詠まれるのは、遺された周囲の人々の深い哀しみを表す場面にある。

登場人物終焉の場面でその詠歌に「萩のうは(上)露」が用いられるのは、紫上のみである。物語世界で、死に至るまで描かれる他の女性たちの最終詠を思い起こしても、「萩」「露」が持ち出されるわけではない。

物の怪に取り憑かれた葵上は、その最期を描く場面に和歌そのものが置かれず、「煙」「雲居」の語がみられるのも追悼する周囲の人々の歌である。

のぼりぬる煙はそれと分かねどもなべて雲居のあはれなるかな

葵巻 四八頁

限りあれば薄墨衣あさけれど涙ぞ袖をふちとなしける

葵巻 四九頁

周囲の悲しみを表すなかに、情景や天象が関わってくる。

六条御息所の場合は、葵上の死去後、光源氏からの贈歌「人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそやれ」(葵巻 五一頁)への返歌に「とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかなき」(葵巻 五二頁)と、贈歌の「露けき」を受けて「露の世」という語が詠まれていたが、六条御息所の死を描く場面に「萩」「露」はみられない。「まことや」と話題を転換して語り出されるその滯標巻末では、御息所の歌も光源氏との贈答歌もおかれず、二人の会話を描きこむことに終始する。御息所死去後、光源氏が遺された娘の斎宮に贈る場面に至り「雪、霰かき乱れ荒るる日」(滯標巻 三一五頁)と天象が描かれ、光源氏の「降りみだれひまなき空に亡きひとの天かけるらむ宿ぞかなしき」(滯標巻 三一五頁)と、「雪」「霰」が降るといふ表現がみられる。

藤壺宮の場合も、その死を描く場面が光源氏と藤壺の会話によつ

て構成され、光源氏との会話ののち「灯火などの消え入るやうにてはたまひぬれば」（薄雲卷 四四七頁）と息絶える様子が描かれている。物語は悲しみにくれる光源氏を描きとる際に、「夕日はなやかにさして、山際の梢あらはなるに、雲の薄くわたれるが鈍色なるを」（薄雲卷 四四八頁）と天象に関わる情景描写を取り入れ、この巻名の由来でもある、光源氏の詠歌「入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる」（薄雲卷 四四八頁）を置く。情景や天象の描写そのものが、物語世界を去るその人ではなく、遺された周囲の悲しみを強調して表現する手段である。

光源氏死後の子孫たちの世界を描く物語では、宇治川近い山里を舞台とし自然が重要であるが、宇治の大君の死は、やはり薫と大君の会話のなかで描かれ、大君を追悼する薫を描くくだりに、「雪のかきくらし降る日」（総角卷 三三二頁）「十二月の月夜の曇りなくさし出でたるを」（総角卷 三三二頁）と天象が描かれ、続く薫の独詠歌に「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」（総角卷 三三三頁）「恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし」（総角卷 三三三頁）とある。

生涯を終える当人が自然を和歌に詠むことしたいが異例であり、自然や天象によって表されるのは、残された周囲の悲しみである。

物語で確認できる女性たちの最終詠は、それぞれの造型の重要な一端を担う。紫上は、我が身をみつめ、それを象徴する歌語「萩の上露」によって自らを表すが、その造型の特徴である。

今井久代氏は、紫上の終焉場面では自然描写が極限まで簡潔であ

ることに着目され、自然を視覚的ではなく聴覚を研ぎ澄まし、心に浮かぶ景をみつめながら感ずる場面であるとし、居合わせる三者がともに萩の上に置く露を幻視すると指摘された。¹³⁾「風すごく吹き出でたる夕暮に」（御法卷 五〇四頁）と語り出される当該場面には、吹きすさぶ風の音が聞こえ同時に肌寒さも感じられ、聴覚とともに体感にも訴える表現となっている。確かに、室内にいる三者が外の萩の上に置く露を実景として見ていたとは考えにくい。実際、庭の前栽の萩には露があつたかもしれないが、ここで三者がとらえているのは、秋の景物としての共通認識のもとに幻視された露であろう。露が幻視される一方で、紫上はいまある我が身を直視する。病篤く終焉を感じ身近な人々に思いを馳せて心を揺らしながらも、自身に向き合い、鋭く直視する自己を的確に表すのが「萩のうは（上露）」である。それは、ありきたりの歌語とは微妙に一線を画し、物語世界で賞賛を呼び続けた女性のために選ばれた語である。心情語を排し、言葉によってわが身を表す造型が際立つ。

四、「我が身」への意識

御法卷の三者詠は、紫上の歌を受けて続く光源氏と明石中宮が萩の露を詠みこみ、それが三者による唱和の中核をなす。歌語に注目すれば、紫上の「萩のうは（上）露」を、光源氏、明石中宮が同様にいるわけではない。紫上は「風にみだる萩のうは露」と、あくまでも風に吹き乱れる露そのものを詠み、みつめるのは我が身を

象徴する景物そのものである。しかし、光源氏は景物としての露ではなく、「消えをあらそふ露の世に」と消えゆくあとさきを競う露のようにはない「世」を詠み、微妙にずれが生じる。さらに明石中宮は、両者をなだめるように「しばしとまらぬつゆの世」、わずかの間もとどまることができない露のような「世」と、意識的にずらして詠む。和歌のやりとりゆえの趣向ではあるが、紫上は景物として風に吹かれる萩の上に置く露を真正面から見据えるのに対し、光源氏と明石中宮は、「つゆ（露）の世」に向かう。「露の世」という語は、古来から定番の歌語ではなく、『後撰和歌集』に「しらつゆの世」とある例が早い。

424 わがごとく物思ひけらししらつゆのよをいたづらにおきあかし
つつ 『後撰和歌集』 題しらず よみ人も

このよみ人しらず歌ののち、『一条撰政御集』に「露の世」がある。

又、返し

70 あくるまもひさしてふなるつゆのよにかりの心もしらじとぞ思
ふ 『一条撰政御集』

「露の世」は、『源氏物語』に先行する作品では『うつほ物語』に二例あり、藤壺の歌を受ける東宮の歌「露の世もまつにかかればぬきとめて風にもきえぬたまとこそなれ」（国譲上 三六頁）で、露

も松にかかれば消えぬ玉となるのだから、私をたのみにせよ、とはかない露も消えない状態になると反転させて詠む例と、藤壺の歌「呉竹の節にはあらでかかる身の露のよのまま嘆かるかな」（国譲上 七二頁）の「世」と「夜」をかけ、露のようにはない世^{II}夜の間もという意になる例がある。

『源氏物語』では、御法巻の当該場面のほか、葵巻、総角巻に各一例ずつあり、六条御息所への光源氏の返歌で「とまる身も消えしも同じ露の世に」（葵巻 五二頁）と亡くなった葵上とわが身のはかなさを同等とする表現、薫の会話で「あはれなる御一言を聞きおき、露の世にかかづらはむ限りは」（総角巻 一三〇頁）とあり、いずれも露のようにはない世という意味で共通する。

光源氏、明石中宮が用いた「つゆ（露）の世」は、用例は多くないものの、勅撰集や先行物語で用いられ、『源氏物語』にもみられる語である。

弱りながらも自己の生命を直視する紫上は、三者の和歌において、続く光源氏や明石中宮とは一線を画していよう。

ここに至る紫上の心情をたどりみれば、我が身への意識が重ねて描かれていた。

みづからの御心地には、この世に飽かぬことなく、うしろめたき絆だにまじらぬ御身なれば、あながちにかけどまほしき御命とも思されぬを、年ごろの御契りかけ離れ、思ひ嘆かせたてまつらむことのみぞ、人知れぬ御心の中にもものあはれに思

されける。

御法卷 四九三頁

御ゆるしなくて、心ひとつに思し立たむも、さまあしく本意なきやうなれば、このことによりてぞ、女君は恨めしく思ひきこえたまひける。わが御身をも、罪軽かるまじきにやと、うしろめたく思されけり。

御法卷 四九四―四九五頁

惜しからぬこの身ながらもかぎりとして薪つきなんことの悲しさ

御法卷 四九七頁

上下心地よげに、興ある気色どもなるを見たまふにも、残りすくなしと身を思したる御心の中には、よろづのことあはれにおぼえたまふ。

御法卷 四九八頁

さすがに情をかしたまふ方々は、誰も久しくとまるべき世にはあらざなれど、まづ我独り行く方知らずなりなむを思しつづくる、いみじうあはれなり。

御法卷 四九八―四九九頁

御法卷では、紫上自身の心中にそって、紫上の「わが身」への意識が重ねられていく。子に恵まれなかつた身、罪障深く出家の叶わぬ身、常套的な言い方ながら「惜しくはない」身、残り少ない身、そして、「身」という語はないが行方知らずになってしまふ「我独り」と、紫上は、容態のすぐれぬなかで、悲嘆にくれる光源氏を思

いやり、みずからも悲しみを抱きつつ、自身を鋭くみつめていた。「あはれ」が多用され、ゆきつくところは、達観でも仏道への憧憬でもなく、現世にとどまるわが身と、心をかける身近な人々への思いである。深い悲しみのなかでも、いまある自身を真正面からとらえる紫上の凜とした人物造型。そこで選び取られているのが、最終詠歌の「萩のうは（上）露」である。

注

- (1) 『源氏物語』、その他の物語作品の本文引用ならびに頁数は、すべて新編日本古典文学全集（小学館）による。
- (2) 倉田実「紫の上の（辞世の歌）」『紫の上造型論』（一九八八年 新典社）。
- (3) 吉見健夫「御法卷における紫の上の和歌と来世信仰の形成——源氏物語の読解・享受と作中和歌——」中野幸一編『平安文学の交響——享受・摂取・翻訳——』（勉誠出版 二〇一二年）。
- (4) 注(2)倉田氏文献。
- (5) 「辞世の歌」（太田義之氏担当）『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 ⑩御法・幻（至文堂 二〇〇一年）。
- (6) たとえば、『歌ことば歌枕事典』「露」の項（渡部泰明氏担当）では、「歌ことばの露は、主として秋期に用い、また草木の上に置くことが圧倒的に多い」と特におののけの露は用例が多い」と説明される。
- (7) 和歌本文の引用ならびに歌番号は、すべて新編国歌大観による。『万葉集』については、ひらがな表記のみをあげた。
- (8) 佐伯梅友・村上治・小松登美『和泉式部集全釈 続集篇』（笠間書院 一九七七年、新装版二〇一二年）。
- (9) 用例はそれぞれ次のとおりである。

340 大虚霧起紅色播（おほぞらにきりたちてこうしよくをまく）

星浦泉流菊黄光（せいほいづみながれてきくくわうくわう）

未聞一年再露泛（いまだきかずいちねんふたたびさかづきをうかべ）

世上露叫述約齡（せじやうのつゆささやきてしやくれいのをのぶ）

『新撰万葉集』

女返し

27 なほざりにしののめよりぞあけ暮はうは露ばかりおくといふなる

『本院侍従集』

本院侍従の生没年は未詳だが、新編国歌大観解題では、「朱雀帝の天慶年間

（九三八～九四七）から村上帝の天徳年間（九五七～九六一）にかけて、村上

帝の後藤原安子、女御徽子女王などに伺候」した女性と推測する。

(10) 田中幹子「秋はなほ夕まぐれこそただならぬ萩の上風萩の下露——和漢朗詠

集の秋の夕（秋興・秋晩）について——『京都語文』一九九八年一〇月。

(11) 判詞には次のようにある。

けふのはんをみれば、といひたはぶれてまかりいでなんとするほどに、
みすのうちを^{つら}かけば、兵衛のすけたちばなのなかきといひし人のむすめ、
これかれなどさぶらひてよのふけゆくままに、さやけさまさる月にこ
とのねをしらべあはせたるに、ごぜのにはのおもを見わたせば月かげ
のおほるなるに花いろいろにうちみだれ、風のおとも夜さむになりゆ
くに、むしのごえごゑなきあはせたり、かかることもをききしるのび
すてて、いまはまかりいでなんとて、はぎのしたつゆにころもでのぬ
るるもしらでおりあて、おほみきたぶなりときこしめして、……略……

(12) これについては、拙稿『源氏物語』と和歌のことば——桐壺更衣「いのち
なりけり」の場合——『跡見学園女子大学紀要』（二〇一二年三月）を、あ
わせてご参照いただければ幸いです。

(13) 今井久代「源氏物語の自然表現——若菜巻以降の紫の上の叙述をめぐって」
『東京女子大学紀要論集』（二〇一二年九月）。